

朝鮮住宅営団の住宅に関する研究(1) (梗概)

富井 正憲

—ソウルに現存する旧営団住宅を中心に—

はじめに

研究の目的

朝鮮住宅営団は韓半島における最初の公営住宅供給機関として日本住宅営団に遅れること2ヵ月1941年7月に設立され、1945年まで主要都市に住宅を建設供給・運営した。

1945年以降その継続工事と運営は大韓住宅営団に引き継がれ、1958年からは名称を大韓住宅公社と変えて、以後韓国の中核的な公営住宅供給機関として現在に至っている。また営団住宅は戦後住み手が日本人から韓国人に移りかわり様々な変容をしながら40数年を経てきている。

以上の歴史的背景をふまえて、本研究は朝鮮住宅営団が韓半島に計画・建設した住宅及び今日ソウル市内に現存する旧営団住宅を対象として

- ①朝鮮住宅営団の概要
- ②旧営団住宅の現況について
- ③朝鮮住宅営団標準設計住宅の復原
- ④—1. 韓半島と日本の営団標準住宅の比較考察
- ④—2. 営団標準住宅の変容過程の分析

の4つの枠組みをもち、①では朝鮮住宅営団の史的概要を解明していくと共に、②で住宅の現存及び現況状況を述べ、③では原型の復原を行う。さらに④では、特に日韓両国の地域差、及び、住み手が日本人から韓国人に移り変わったことに視点を据えて比較住居論的な立場から検討を行い、相対的な視野の中で住まいのもつ特性を探ることを目的とする。

研究の方法

本研究は史的事実を把握するための文献調査と変容過程を明らかにするための実測等の現地調査から成る。

日本国内の文献収集後、現地に滞在し、ソウル市内での住宅の現存調査と文献収集を行った。次に住宅の現存状況と文献資料の検討から、実測のため、大規模で現存状況の良い住宅地である銅省区の上道洞をケーススタディとして選定した。

上道洞での実測調査は、個別訪問により、平面の実測・

家具配置・室名呼称・写真撮影・聞き取りを同時に行った。調査期間は3回にわたり計88日間、調査した住宅は65軒である。またこの期間は実測調査に並行して当時の関係者への聞き取り調査も行っている。

研究の枠組みのうち朝鮮住宅営団の概要等、事実関係を明らかにするためには、朝鮮住宅営団が当時発行した文献、及び雑誌「朝鮮と建築」により発表された営団関係の資料を使って考察した。建設当時の標準住宅の再現には、文献資料に現存実測住宅の資料を加えて検討を行い復原した。また、標準住宅の特性は、①日本式の住まいが異なる地域において建設されるときの変容を、日本の営団住宅、及び韓国都市型伝統韓屋と比較分析することから、明らかにし、②住み手が韓国人に変わってからの住様式の変容と存続については、営団標準設計住宅の原形平面図と現況平面図とを比較分析し、考察した。

1. 朝鮮住宅営団の概要

1-1. 設立の時期とその背景

1937年(昭和12年)のシナ事変勃発以来、日本では軍需産業が拡大されていった。その産業地域への労働力流入に伴う人口集中は急速に進行していき、その地域に極端な住宅不足を招いた。この住宅不足を解消するため政府は1941年(昭和16年)5月に日本住宅営団を設立し、いわゆる「国民住宅」を建設していった。

このような状況は、当時日本の統治下にあり、軍事上大陸への重要な拠点になっていた朝鮮半島においても顕著に認められた。深刻化する住宅不足の中で民間の貸家業者は戦時下という特殊な状態から、住宅の建設資材や建設資金の調達が困難になり利潤の追求が望み難くなると、新たに供給する住宅の量を減少させていった。この住宅不足が国民の住環境を悪化させた。このため国家事業に悪影響を及ぼすことを恐れた朝鮮総督府は、その対策にのり出し、1939年(昭和14年)7月には住宅対策委員会を設置した。住宅対策委員会は、住宅建設に必要な資金や資材及び土地などについて様々な助成を行ったが、問題の解消には至らなかった。そこでこの状況に、より直接的に働きかける機関を組織することが望まれ、

日本に住宅営団が設立されてから遅れること2ヵ月、朝鮮住宅営団が設立されることになったのである。

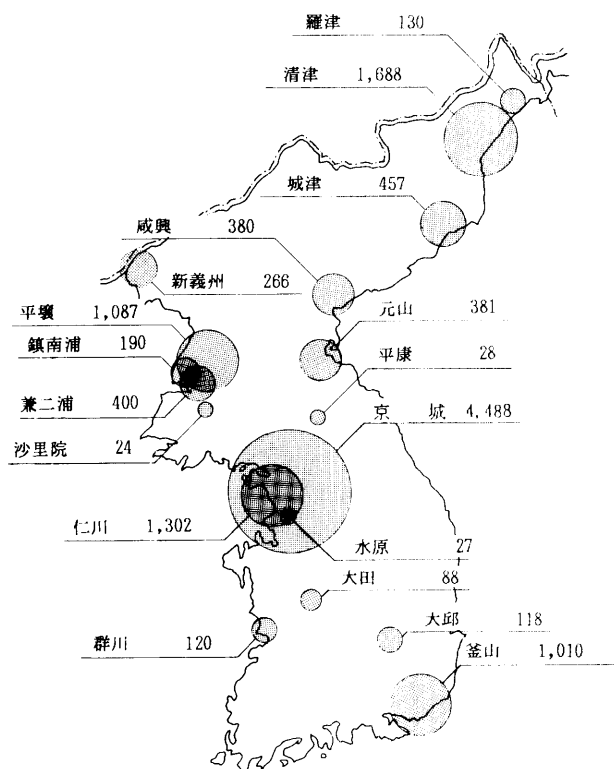
1-2. 設立の目的

朝鮮住宅営団の設立目的は1941年6月14日に公布された「朝鮮住宅営団令」の第1条と、1944年7月に朝鮮住宅営団により作成された「朝鮮住宅営団の概要」に記されている。「朝鮮住宅営団」の第1条は「朝鮮住宅営団ハ労働者其ノ他庶民ノ住宅ノ供給ヲ計ルコトヲ目的トス」と定められている。また「朝鮮住宅営団の概要」には「労働者其ノ他庶民ノ住宅供給ヲ計ル」即ち「労働者又は中流以下の俸給生活者などの中小住宅を建設供給し依て以て国民生活を確保し生産力を増強することを目的としております」と記されている。

当時の朝鮮総督府政務総監である大野録一郎は昭和16年7月に発刊された雑誌「朝鮮と建築」の中で「現下の深刻なる住宅難を打開し併せて住宅に関する生活の向上発達を期する目的を以て今日朝鮮住宅営団令が制定公布せられましたことは……」と述べており、朝鮮住宅営団は住宅難を緩和するという、単に量的な解決を行うためだけに設立されたのではなく、住宅に関する国民意識への向上の願いからその質的な問題解決も設立の目的にあることを示唆している。

1-3. 事業計画とその進展状況

1941年（昭和16年）京城をはじめとする朝鮮半島の19の都市における総絶対住宅不足量はおよそ6万戸であつ



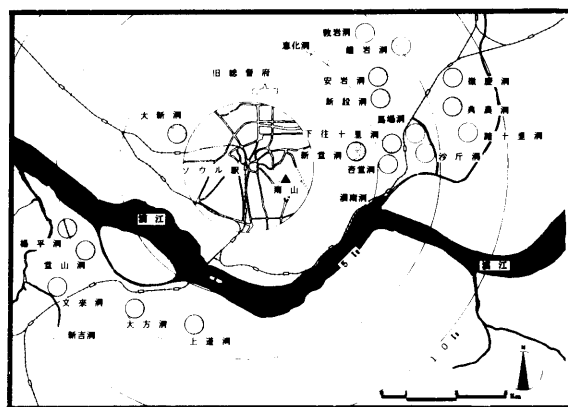
図一 地域別建設戸数分布表 1945年

た。そこで、朝鮮住宅営団がその1/3に相当する2万戸の住宅を建設することになり、1941年7月初めから1945年6月末日までの4年間で毎年5,000戸ずつ、計2万戸の住宅を供給する計画をたてた。実際に建設した住宅戸数を、建設地域別に分類してまとめたものが図1である。初年度の5,000戸のタイプ別建設予定戸数は、甲型・丙型各1,000戸、乙型1500戸、丁型・戊型各750戸であった。1945年（昭和20年）8月15日までの事業の進展状況を調べてみると、朝鮮半島全体に合計12,184戸の住宅が建設された。当初の事業計画に比較すると約6割強にしか満たなかった。これは、当初の計画には遙かに及ばないものとなっている。この理由には、戦時下といった特殊な状況下であることを原因とする宅地造成作業の遅れ及び物資統制令による資材の入手が困難であったことがあげられる。

2. 旧営団住宅の現況について

2-1. ソウル市内旧営団住宅の現存状況

現地調査によりソウル市全体で11地域の現存状況（表一）が判明した。旧営団住宅は切妻屋根の続く、緑豊かな住宅地を形成していることが多く、周囲から区別しやすい。また図2のソウル市内の現存状況を見てみると、その建設地のほとんどはソウル駅から5km~10kmの同心円の範囲にあり、いわゆる都市近郊に建設されていることが分かる。また、旧鉄道の駅付近に集中していることも特徴としてあげることができる。この中で旧営団住宅の現存数が一番多いものは文來洞（旧・道林洞）で、丙・丁型住宅が651軒確認された。また比較的保存状態が良い



図二 ソウル市内旧営団住宅現存状況（1987年9月現在）

表一 現存調査状況

地区	1987年9月現在											計															
	大田	大邱	釜山	蔚山	仁川	平壤	元山	咸興	新義州	元山	平康		京城														
総戸数	486	1067	551	51	249	140	40	47	125	65	15	17	67	35	24	60	39	34	166	13	225	204	516	25	16	30	4472
現存調査	57	319	652	51	249	140	40	47	125	65	15	17	67	35	24	60	39	34	166	13	225	204	516	25	16	30	1157
住宅型	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲	甲
	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙	乙
	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙	丙
	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁	丁
	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊	戊

*調査は1987年3月~9月に実施された。
*その他は、建築記録が100%以上あるものと推定される。

地域として上道洞、大新洞、北阿視洞、安岩洞をあげることができる。このうち上道洞では、比較的規模の大きい甲・乙型住宅が最も多く現存する。

2-2. 上道洞旧営団住宅地

上道洞旧営団住宅地は道林洞・大方洞と並んで営団の三大事業と称され、パイロットモデル住宅地として昭和16年の営団設立直後に住宅建設が始められた。上道洞は旧京仁線鷲梁津駅より徒歩20分、周囲を小高い山に囲まれた盆地に位置する。住宅地の広さは196,000坪。このうち住宅地が7割強、道路が2割強その他が公園、学校等の用地に充てられた。当時の住宅造成図と現在の地図を比較検討してみると、4つのロータリーを中心とした道路、街区、宅地割、公園、学校の位置は昔からほとんど変わっていない。(図-3)

「大韓住宅公社二十年史」によると1945年の時点で1,067軒の住宅が存在した記録が残っているが、今回の調査において319軒の現存(表-2)が確認できた。各宅地は当時営団が「敷地は防空・防火等の非常の際を考慮して建坪の約三倍」と定めて造成したため、庭が広くて、今日もソウル市内で評価の高い住宅地のひとつとなっている。また、敷地が大きいため増築面積に余裕があり、比較的旧営団住宅の現存状況が良好である。



図-3 上道洞における旧営団住宅の現存位置図(1987年11月現在)

2-3. 上道洞旧営団住宅の現況

上道洞の旧営団住宅は現在、アンパン(内房:食事、

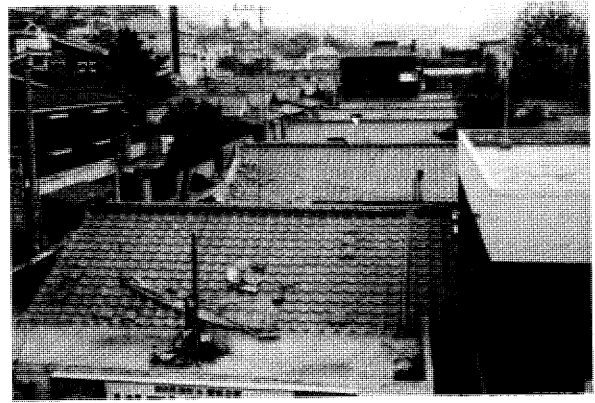


写真1 上道洞旧営団住宅(1987年3月現在)

表-2 住戸タイプ別現存表(1987年11月現在)

住戸タイプ	現存数	調査件数	備考
甲型一號	45	8	
甲型二號	11	3	
甲型三號	1	1	
甲型四號	3	2	
甲型五號	5	1	
甲型六號	0	0	不明
甲型七號	19	4	
甲型八號	0	0	
甲型九號	10	4	
甲型十號	0	0	不明
甲型十一號	0	0	不明
京城電気社宅	11	4	
乙型一號	24	6	
乙型二號	131	19	
乙型三號	0	0	不明
乙型四號	8	4	
乙型五號	0	0	
乙型六號	0	0	不明
乙型七號	0	0	不明
乙型八號	0	0	不明
乙型九號	2	1	
乙型十號	0	0	不明
不明型	49	8	
合計	319	65	

だんらん、夫婦の寝室)、マル(板の間:居間、だんらん)、コシル(マルと同意語、洋風居間)、プオク(釜屋、台所)、その他の房(パン:部屋)から構成されている戸建または長屋式住宅である。住宅の平均規模は甲型住宅で24.6坪、乙型で19.8坪で、建設時と比較するとそれぞれ4坪程度増築を行っている。また居住形態は複雑で、他世帯に部屋を貸している事例が多く、他世帯との同居率は全体の37.8%にのぼる。平均住居者数は4.7人/戸である。

外観意匠は現在でも昔のままの姿を残しているものが多く、外壁のモルタルは、ほこりと汚れて黒くなっている。また通りに面した部分は増改築が多く、店舗等に利用している場合も少なくない。一方外観がモダンに化粧直しされ、一見しただけでは旧営団住宅とは分からない

住宅も現存する。

塀は平均すると1m90cmの高さをもち、ブロック、レンガ等を積み重ねている。鉄索をその上に備えている所もあり、全般に閉鎖的な印象を受ける。門は門柱だけのものと屋根をもつものがあり、通常門戸が開放していることはない。訪問はブザーかインターホンを通して行い、オートロックで開閉をする。

玄関の位置は、ほぼ大門の正面に位置する。玄関ではすべての住宅で履物を脱いで上がり、げた箱をもつ。中にはオンドルのボイラーが設置されているものもあった。

全般として庭には緑が多いが雑然としている。中にはチャンドクデイ（キムチ等の瓶を置く台）が庭の南側部分を占め、西南側に増築された居室が庭を囲むため中庭平面を構成しており、作業場として使用する所も多く見られた。井戸をもつ住宅も5軒ほど見られ、やはり庭を家事、洗濯等の作業場としている。

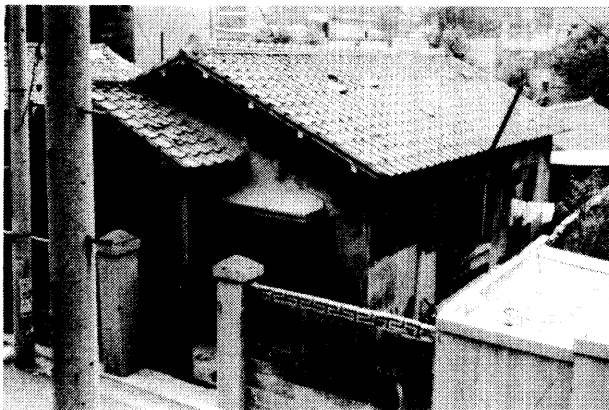


写真2 上道洞の旧営団住宅（1987年9月撮影）

室内は玄関を入ると、廊下がブオク（台所）まで続きその両側に居室が付属する中廊下型構成になっているものと、広間にむかって各室のドアが並ぶ広間中心型とがある。廊下をもつものは床が板張り、壁、天井は紙張りであるものが多い。居室は板張りかオンドル紙張りが主で、中には安価なりノリウムを敷いている所もある。

ブオク（台所）はプロパンガスのコンロとステンレスの流しを備えている板床をもつものと、土間でかまどを使用しているところが見られ、オンドルの余熱を利用して調理を行っている。便所は和式のものや洋式のものに分かれる。和式ものは板張り、洋式ものはタイル張りの内装をもつ。浴室をもつところは少なく、浴槽を備えていても洗濯室としてのみ使用しているところがほとんどである。住み手の居住歴は平均すると4～5年で、借家であるものが多い。持ち家の家族の中には戦後45年間住み続けている所もいくつか見られた。

3. 上道洞における旧営団標準設計住宅

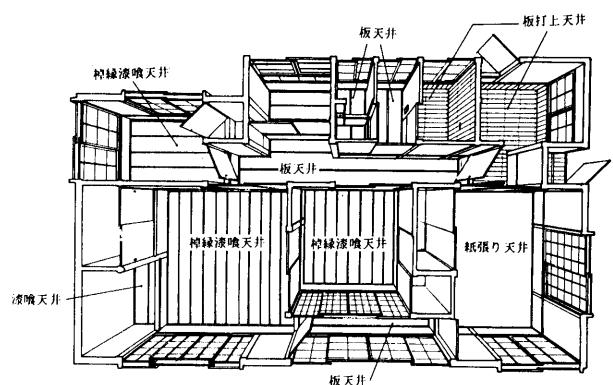
営団で計画された標準設計住宅の概要は文献より分析した結果以下の通りであった。

- 1 中流以下の俸給生活者を対象とする。
- 2 種々雑多な住宅の建設は建築費の高騰を招くので、なるべく規格を統一する。
- 3 多大な量であるので、急ぐあまり絶対的質を犠牲にすることがあってはならない。
- 4 建坪を20坪以下にする。（表一3参照）
- 5 庭を設ける。敷地は建坪の3倍とする。
- 6 外観は内地式建物を基準とする。
- 7 内部設計は朝鮮の気候風土に適合できる様、畳敷及びオンドルを適当に配置する。
- 8 どの家も、1日4時間以上の日光が当たるようにする。
- 9 原則としてオンドル房を1つ以上確保する。京城以南はオンドル房のある家とない家を半々とする。
- 10 甲・乙・丙型には浴室を設置し、浴室がない住宅などは50戸単位で共同浴場を設置する。

以上の基準にしたがって計画された営団住宅を、今回、上道洞住宅地を調査対象として、住宅の型に欠落がないように選択しながら甲型33軒、乙型32軒計65軒の実測調査を行った。現地調査で判明した住戸タイプは甲型が11

表一3 朝鮮住宅営団の住宅の型（1943年7月）

型別	間数	1戸当り標準建坪数
甲	4間（8畳・6畳オンドル・4畳半） 3畳	20坪
乙	3間（6畳・4畳半オンドル・4畳半）	15坪
丙	2間（6畳・4畳半オンドル）	10坪
丁	2間（4畳半・4畳半オンドル）	8坪
戊	2間（4畳半オンドル・2畳）	6坪



図一4 甲型四号天井仕上げ図（建設当時）

種乙型が5種である。この調査資料に文献資料をあわせて検討した結果、16種類の建設当時の原型平面が図-6のように明らかになった。この復原した住宅の平面図のうち、営団が当時使用していた型番号呼称まで判明したものは13例である。また文献で判明した平面図のうち、甲型8号、乙型5号は上道洞には現存しない。不明型としてあるものは上道洞に現存して実測調査によって復原したが、文献等に記録がないものである。また京城電気社宅としてあるものは営団が依頼を受けて設計したものと考えられている。

平面構成は続き間座敷をもつ中廊下型が基本である(16例中14例)。玄関は北入り型が8例、南入り型と東(西)入り型が各4例ずつである。居室数は甲型が1例を除いて4室、乙型はすべて3室であるが、各平面の室の大きさは定まっていない。図-5に見るように居室は畳敷き、内部意匠は真壁、天井は棹縁漆喰天井であるが、例外なくすべての台所に隣接する居室に限ってはオンドル部屋になっていて、天井と床に紙が貼ってある。居室は腰付き二重窓で、庭には縁側からのみ出入りができる。

これらの住宅は屋根をセメント瓦葺、外壁をモルタル吹き付け大壁、内部を真壁にした切妻屋根木造平屋建てで関東間をモジュールとした規格化住宅である。床高は

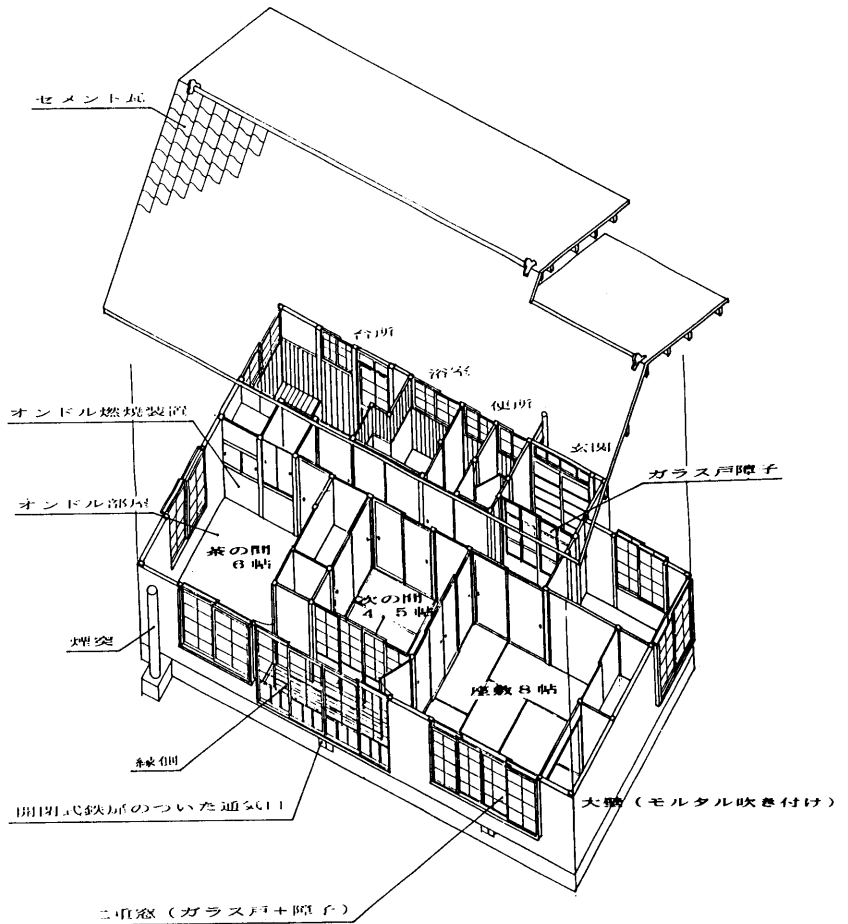
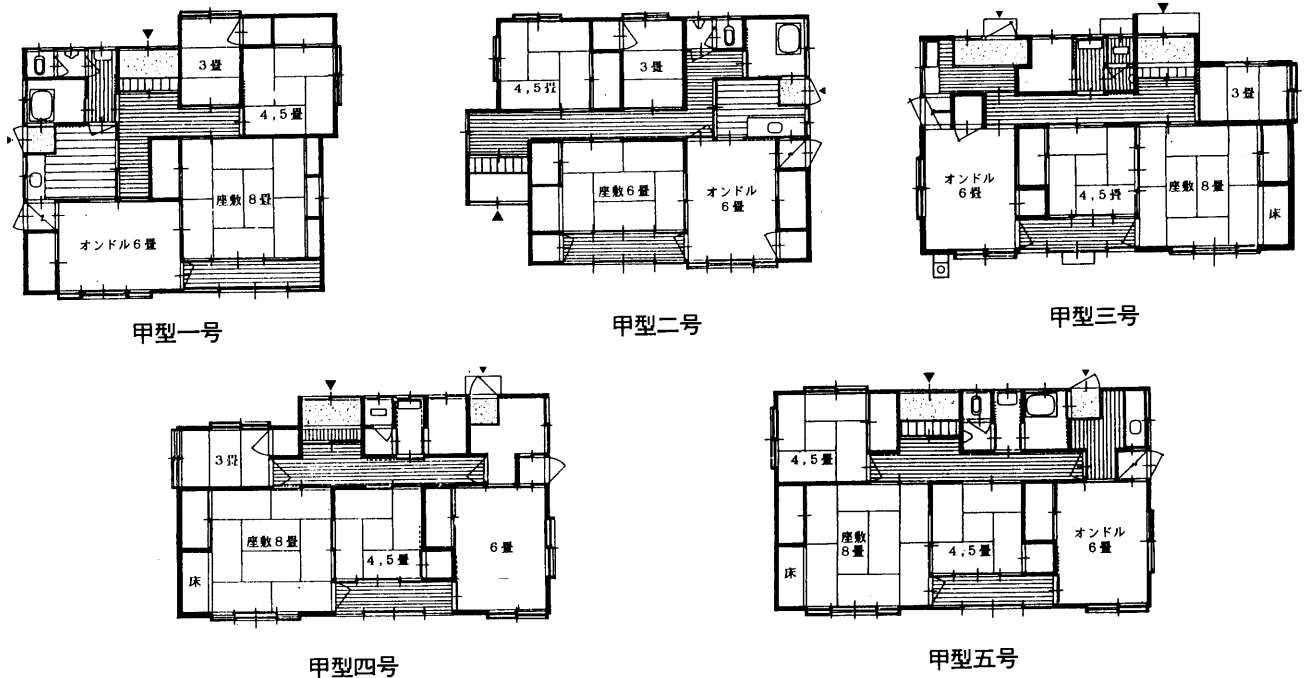
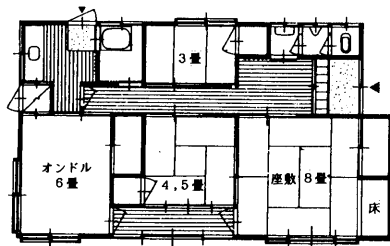


図-5 甲型三号仕様図(建設当時)

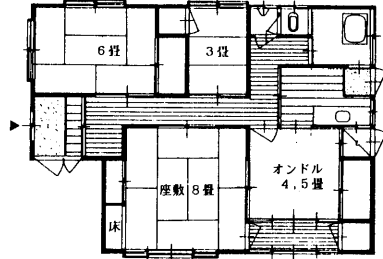
1尺8寸(約540mm)、天井高は居室で8尺(約2.400mm)縁側・廊下部分で7尺6寸(約2.300mm)である。柱は3寸5分(約100mm)、また土台基礎は75cmを掘り下げ凍結を防いでいる。

実際に建設された住宅を復原(図-4、5)してみる

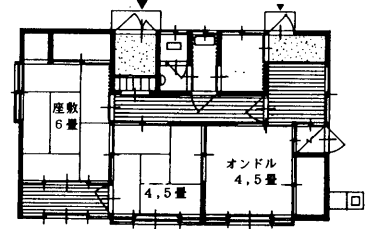




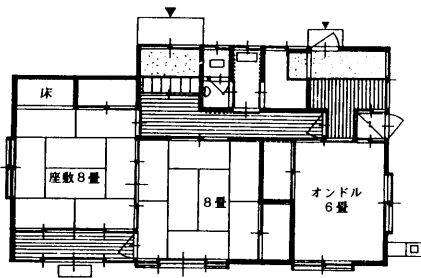
甲型七号



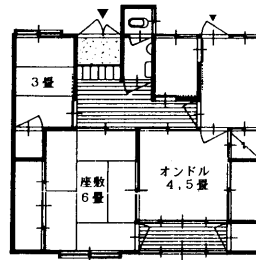
不明型



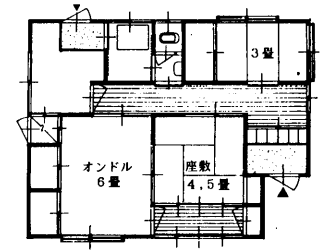
乙型五号



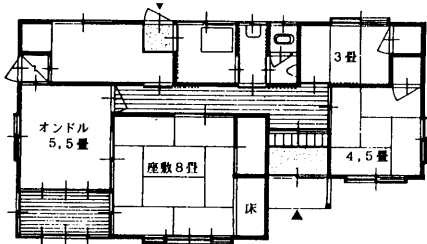
甲型八号



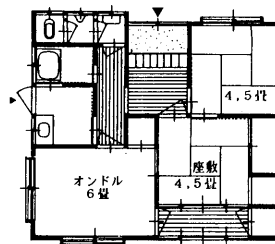
乙型一号



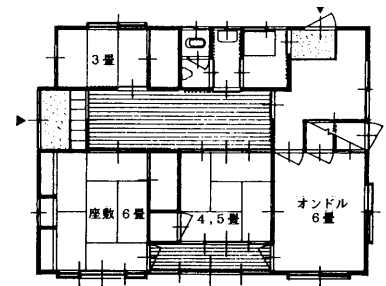
乙型九号



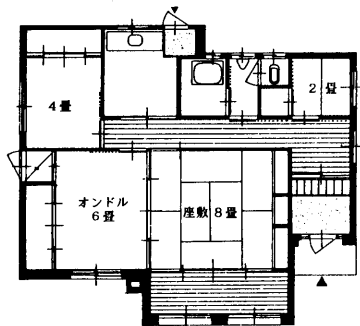
甲型九号



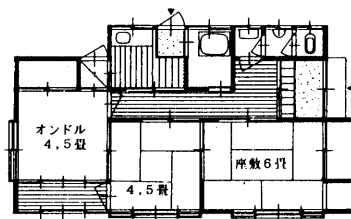
乙型二号



不明型



京城電気社宅


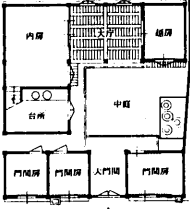

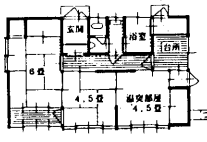

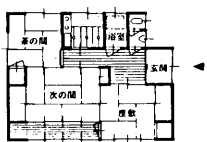


乙型四号

ここに記載した平面図は、実測調査と文献資料をもとに制作、復原した。尚、甲型六号、十号、十一号、乙型三号、六号、七号、八号、十号は現在、型番号と平面図が不一致もしくは資料不足のため記載していない。

図一六 朝鮮住宅営団標準設計図

表一 4 朝鮮住宅営団の住宅を中心とした韓国の伝統住宅, 日本の営団住宅との比較一覧表

 <p>・都市型伝統韓屋</p> 	 <p>・朝鮮住宅営団</p> 	 <p>・日本住宅営団・同潤会</p> 																																																																														
<table border="0"> <tr><td>全体</td><td>・中庭式住居、L又はUの字型</td></tr> <tr><td>屋根</td><td>・反りのある屋根瓦</td></tr> <tr><td>外壁</td><td>・真壁、漆喰又は土壁</td></tr> <tr><td>窓</td><td>・障子と板戸の二重窓、板の間に窓はない</td></tr> <tr><td>平面構成</td><td>・マル中心型（広間中心型）</td></tr> <tr><td>室内意匠</td><td></td></tr> <tr><td>天井</td><td>・紙張り</td></tr> <tr><td>壁</td><td>・紙張り</td></tr> <tr><td>床</td><td>・オンドル紙張り</td></tr> <tr><td>収納</td><td>・釜屋の上部は納戸</td></tr> <tr><td>台所様式</td><td>・釜屋は土間</td></tr> <tr><td>暖房</td><td>・オンドル、焚口は釜屋</td></tr> <tr><td>設備</td><td>・トイレ、浴室はない</td></tr> </table>	全体	・中庭式住居、L又はUの字型	屋根	・反りのある屋根瓦	外壁	・真壁、漆喰又は土壁	窓	・障子と板戸の二重窓、板の間に窓はない	平面構成	・マル中心型（広間中心型）	室内意匠		天井	・紙張り	壁	・紙張り	床	・オンドル紙張り	収納	・釜屋の上部は納戸	台所様式	・釜屋は土間	暖房	・オンドル、焚口は釜屋	設備	・トイレ、浴室はない	<table border="0"> <tr><td>全体</td><td>・外庭式住居、矩形</td></tr> <tr><td>屋根</td><td>・切り妻屋根、モルタル瓦</td></tr> <tr><td>外壁</td><td>・外壁モルタル吹き付け</td></tr> <tr><td>窓</td><td>・二重窓（ガラスと障子）</td></tr> <tr><td>平面構成</td><td>・中廊下型、つづき間</td></tr> <tr><td>室内意匠</td><td></td></tr> <tr><td>天井</td><td>・漆喰天井</td></tr> <tr><td>壁</td><td>・真壁</td></tr> <tr><td>床</td><td>・タタミ、茶の間はオンドル紙張り</td></tr> <tr><td>収納</td><td>・押入、外部倉庫有り</td></tr> <tr><td>台所様式</td><td>・台所は板張り、一部揚板</td></tr> <tr><td>暖房</td><td>・オンドル、1部屋、焚口は外部</td></tr> <tr><td>設備</td><td>・トイレ、二穴式、浴室有り</td></tr> </table>	全体	・外庭式住居、矩形	屋根	・切り妻屋根、モルタル瓦	外壁	・外壁モルタル吹き付け	窓	・二重窓（ガラスと障子）	平面構成	・中廊下型、つづき間	室内意匠		天井	・漆喰天井	壁	・真壁	床	・タタミ、茶の間はオンドル紙張り	収納	・押入、外部倉庫有り	台所様式	・台所は板張り、一部揚板	暖房	・オンドル、1部屋、焚口は外部	設備	・トイレ、二穴式、浴室有り	<table border="0"> <tr><td>全体</td><td>・外庭式住居、矩形</td></tr> <tr><td>屋根</td><td>・切り妻又は寄せ棟の組合せ</td></tr> <tr><td>外壁</td><td>・下見板張り又はモルタル塗</td></tr> <tr><td>窓</td><td>・ガラス戸、雨戸付</td></tr> <tr><td>平面構成</td><td>・中廊下、一部片廊下型、つづき間</td></tr> <tr><td>室内意匠</td><td></td></tr> <tr><td>天井</td><td>・棹縁天井</td></tr> <tr><td>壁</td><td>・真壁</td></tr> <tr><td>床</td><td>・タタミ</td></tr> <tr><td>収納</td><td>・各室に押入がつく</td></tr> <tr><td>台所様式</td><td>・台所は板張り・一部揚板</td></tr> <tr><td>暖房</td><td>・ストーブ、火鉢、こたつ</td></tr> <tr><td>設備</td><td>・トイレ、二穴式、浴室はなるべくつける</td></tr> </table>	全体	・外庭式住居、矩形	屋根	・切り妻又は寄せ棟の組合せ	外壁	・下見板張り又はモルタル塗	窓	・ガラス戸、雨戸付	平面構成	・中廊下、一部片廊下型、つづき間	室内意匠		天井	・棹縁天井	壁	・真壁	床	・タタミ	収納	・各室に押入がつく	台所様式	・台所は板張り・一部揚板	暖房	・ストーブ、火鉢、こたつ	設備	・トイレ、二穴式、浴室はなるべくつける
全体	・中庭式住居、L又はUの字型																																																																															
屋根	・反りのある屋根瓦																																																																															
外壁	・真壁、漆喰又は土壁																																																																															
窓	・障子と板戸の二重窓、板の間に窓はない																																																																															
平面構成	・マル中心型（広間中心型）																																																																															
室内意匠																																																																																
天井	・紙張り																																																																															
壁	・紙張り																																																																															
床	・オンドル紙張り																																																																															
収納	・釜屋の上部は納戸																																																																															
台所様式	・釜屋は土間																																																																															
暖房	・オンドル、焚口は釜屋																																																																															
設備	・トイレ、浴室はない																																																																															
全体	・外庭式住居、矩形																																																																															
屋根	・切り妻屋根、モルタル瓦																																																																															
外壁	・外壁モルタル吹き付け																																																																															
窓	・二重窓（ガラスと障子）																																																																															
平面構成	・中廊下型、つづき間																																																																															
室内意匠																																																																																
天井	・漆喰天井																																																																															
壁	・真壁																																																																															
床	・タタミ、茶の間はオンドル紙張り																																																																															
収納	・押入、外部倉庫有り																																																																															
台所様式	・台所は板張り、一部揚板																																																																															
暖房	・オンドル、1部屋、焚口は外部																																																																															
設備	・トイレ、二穴式、浴室有り																																																																															
全体	・外庭式住居、矩形																																																																															
屋根	・切り妻又は寄せ棟の組合せ																																																																															
外壁	・下見板張り又はモルタル塗																																																																															
窓	・ガラス戸、雨戸付																																																																															
平面構成	・中廊下、一部片廊下型、つづき間																																																																															
室内意匠																																																																																
天井	・棹縁天井																																																																															
壁	・真壁																																																																															
床	・タタミ																																																																															
収納	・各室に押入がつく																																																																															
台所様式	・台所は板張り・一部揚板																																																																															
暖房	・ストーブ、火鉢、こたつ																																																																															
設備	・トイレ、二穴式、浴室はなるべくつける																																																																															

と、設備・材料・構造の面で韓国の気候風土に適合するように防寒上の工夫をしながらも、平面・意匠の上では日本内地の様式を厳守している点が注目される。

4. 営団住宅の変容と存続

4-1. 韓半島と日本内地の営団住宅の比較考察

朝鮮半島の営団住宅は従来韓半島に存在した伝統的な形態の住宅とは違い、日本人の持ち込んだ住宅である。本来住宅はそれぞれの地域の気候風土の、強い影響を受けながら形成されている。ここでは気候風土の違う韓半島に建設された営団標準住宅の特質を明らかにするため、営団標準住宅と同時期に建設された日本住宅営団の住宅、及びその母体となった同潤会の住宅との比較分析を表一4のように行い、日韓両地域間の住宅の変容点と存続点を明らかにした。

変容点

1. オンドルの採用

営団住宅には伝統的な韓国の暖房方法であるオンドルの床暖房が採用されている。このオンドルは押入れの下半分が外部からの焚き口になっており、練炭を燃やし、その煙を床下に通して暖めるものである。このオンドルは、生活・就寝空間である茶の間に持ち込まれ、接客空

間としての座敷には持ち込まれていなかった。韓国の寒さは真冬には氷点下10度以下に下がるにもかかわらず、日本人が内地の様式にこだわって畳を捨てなかったのは、興味深い点である。

2. 防寒対策の工夫

営団住宅は、基本的な意匠を和風に保ちながら、細部や見えないところで防寒の工夫を行う努力を行っている。棹縁の間を漆喰で塗り込めてすきま風を防ぐ棹縁漆喰天井、部屋を暖めた空気が逃げないための紙張り天井（茶の間）、ガラスと障子の二重窓、モルタル大壁の外壁、鉄製の開閉式蓋のついた通風口、断熱材としての天井裏の盛り土などがあげられる。

存続点

1. 外観

朝鮮住宅営団の旧営団住宅の外観は切妻屋根に母屋を出し、モルタルで防火被覆している。また、妻側の壁につけられた通風の意匠等は日本の典型的な和風住宅を想像させる。庭も韓国の伝統的な住宅が内庭式であるのに対し、外庭式の構成になっている。そのため、韓国の住宅が建ち並ぶ中で営団住宅の姿は非常に際だっている。外壁仕上げでは朝鮮住宅営団の住宅がモルタル大壁、日本内地の営団住宅は下見板張り仕上げと仕上げ材料の違いがあるが、ガラス戸をもち、開口面積の大きさを見れば非常に開放的である。外観に関しては基本的に内地の住宅

と変わらないと言える。

2. 間取り

続き間座敷をもつ中廊下型平面が基本である。座り式を中心とした住生活は内地と同じである。また住宅に備えられた設備も当時の日本のものと少しも見劣りしないどころか日本内地の営団住宅と比較すると、必ず浴室が備えられていることなど、豪華な面さえもある。

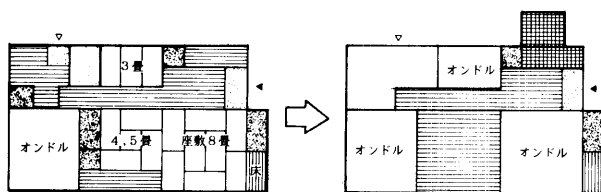
以上のように主な点として；実際に建設された住宅は「寒い朝鮮の気候風土に適合するように材料・構造の上では様々な防寒上の工夫をしながら、基本的には生活・意匠は内地式に準じ、茶の間のみにおンドルを設置した住宅」であったと言える。

4-2. 住み手の変化による営団住宅の変容と存続

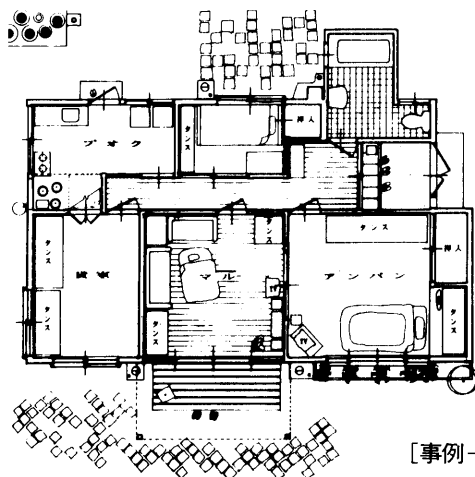
上道洞の営団住宅は1945年の終戦より日本人の住み手から韓国人に移り住まれ、様々な増改築を繰り返して40数年を経てきた。この増改築を分析してみると、その要因には絶対的な床面積の不足、設備の近代化、住意匠の洋風化等があげられるが、この他に住み手が日本人から韓国人に変わったために変容した部分もある。また反対に伝統的韓屋になくても、営団の住空間がそのまま存続した箇所は、韓国人の住生活に新しく入り込んでいった部分と見ることができる。その特徴的なものをあげると以下のごとくなる。

変容点

1. 畳からオンドルへ [事例-1]



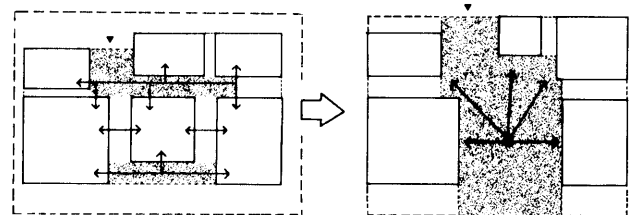
事例-1のダイアグラム



[事例-1]

調査した住宅65軒の全室数224室のうち、畳からオンドル部屋に変容したものは176室(78%)である。また、オンドルに改築されない部屋はマル・コシルと呼ばれる板の間に変容しており、48室(22%)である。このオンドルに変容した室は、個人のための居室としての機能を持つ。またオンドルに変容せず、板の間になった空間は居間、食堂という機能が充てられていて、家族全員が使用する所である。また、畳を残している部屋が1つあった。韓国におンドルは暖房として欠かせない。長い伝統を持つ韓国のおンドルは寒さを防ぐ以外にその触感なども韓国人にとってかけがえのないものになっていると考えられる。プオク(台所)の板床や暖房のないマル・コシルの板の間に数多く敷かれる安価なりノリウムシートもオンドル紙の感触に似ているのか、よく使われている。

2. 中廊下型から板床の広間中心型へ [事例-2]

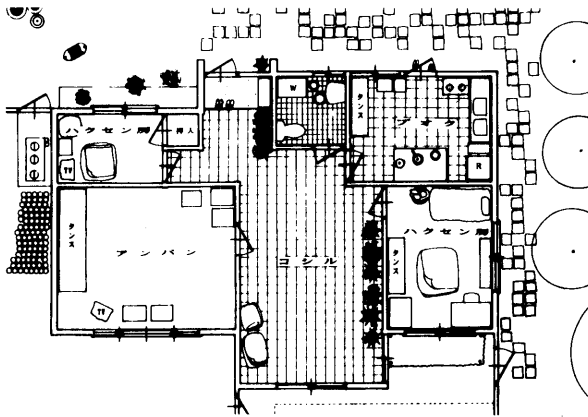


事例-2のダイアグラム

板敷の広間を中心に生活をしている住宅は39軒あった。そのうち平面形式が中廊下型から広間中心型に改築しているものは25軒あり、改築はしていないが、広間中心の住まい方をしているものは14軒であった。また中廊下型のまま住んでいるものが19軒見られた。このうち広間中心型は、改築により床材料の変更をした場合と、間仕切りの変容により廊下、玄関の拡張をした場合とに分かれ、それぞれ25軒(38%)、14軒(21%)であった。伝統的な韓屋ではテーチョン(大庁)のまわりに温突房を配置した板敷広間中心型の住まい方をしているが、変容後の旧営団住宅でも同様の平面構成への移行が見られる。

一方、庭を中心とした外部空間にもこの伝統韓屋への変容と同様の特徴が見られる。居室の増築、倉庫の新築、ブロック塀の築造等の物理的な境界を道路と敷地との間に設けることにより、従来垣根で囲われていた曖昧な境界は現在、明確に外と内を隔てている。そのためにこのような過程で成立した庭の中には、広間と一体化した使われ方をした事例も認められ、住宅の配置から見ると中庭中心型とも言い換えることができる。この中庭中心型は伝統韓屋の住宅配置構成と一致する。

このように住宅の内部、外部において増改築の結果、韓国の伝統的な住宅に類似していることは注目し得る。



各部屋を個室化しているものは56軒（88％）である。日本住宅のもつ続き間・部屋の開放性・ふすまを変更して、部屋のプライバシーを確保している。個室化は、家具により通過できなくするもの、改築により、ふすまを壁にしてしまうもの、ドアへの付け替えに分けられる。韓国伝統住宅の持つ閉じた空間（個室）への類似性が、強く見られる。また、塀を見ても、64軒の住宅が2メートル近くある塀をもち、外部から見て閉鎖的である。韓国人のプライバシー確保の考え方が住宅にもよく表れていると考えられる。

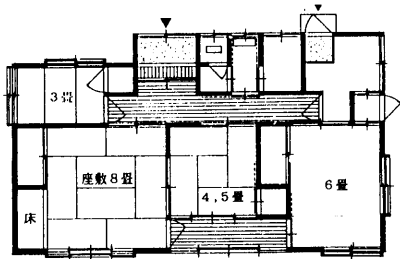
4. 室内意匠

真壁・棹縁天井だった室内は、現在壁紙を天井、壁に張り込んでいる。またマルは天井、壁とも板張りになっているものがほとんどで、伝統韓屋に見られる壁紙を張り込めたオンドル部屋と板の間で吹きさらしのテーチョンとの意匠構成に類似している。

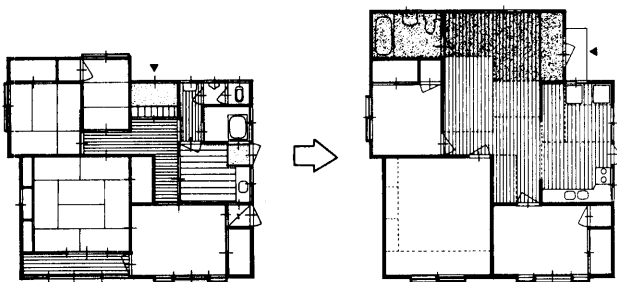
5. スキップフロアの断面形式

煙式暖房を使用する住宅は、プオク（台所）の板張りをとり除いて土間にしており、12例に見られた。このような土間をもつ住宅の中には、プオク（台所）の天井裏（屋根裏）にタラックと呼ばれる収納部分を作っているものがある。この収納空間へは、アンパン（夫婦の部屋）などの旧押入れの戸を利用して、階段を作りタラックに上がるようにしている。伝統韓屋のもつ特長な断面形式である。また、土間にしたプオク部分から、他の居室の床下を掘り込んで半地下の貯蔵庫を確保しているところも見られた。ここには暖房用・料理用の練炭をしまうケースが多い。

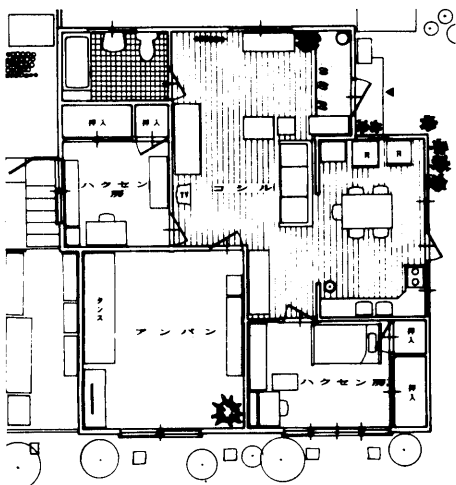
[事例-2]



3. 和室の個室化 [事例-3]



事例-3のダイアグラム



[事例-3]

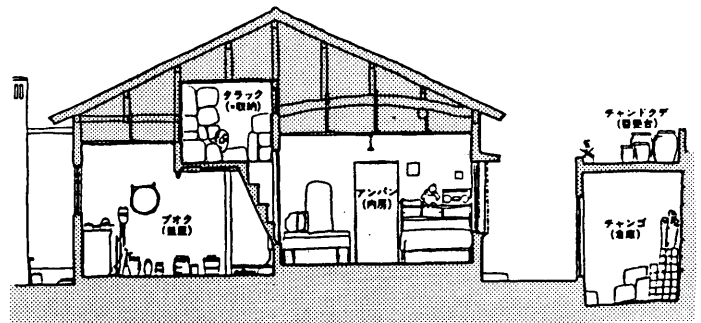


図-7 タラックを取り込んだ住宅（甲型2号）

存続点

1. 座り式生活

起居様式を調べると、ねる・たべる・いる、についてベッド、食卓、ソファを持ち込んでいるのは23軒（35％）にしすぎない。基本はオンドル床と板床での座式生活である。履物を脱ぎ床に座る習慣はもともと日韓両民族の類似点として存在したが、現在も尚、根強く存続していることが分かる。

2. 玄関

玄関は現在63軒（96%）がその空間を存続している。しかし、夏には南側の掃き出し窓から出入りするため使用しない事例も多い。伝統韓屋にはなかった1箇所での出入りする玄関の空間が日本時代に入ってきて、現在まで韓国人により存続しているのは履物を脱ぐ習慣が両民族間に共通にあったからこそ、続いていると言える。ただし、季節による使い分けが存在するのも見逃せない。



写真3 北側玄関を通りより見る（乙型2号）

3. 押入れ

押入れは、旧押入れ面積の52%が存在している。1戸のうちですべての押入れが完全に残っているものは7軒に見られた。また新しく増築した部分に収納を作っているものは11軒（16%）見られた。韓国伝統住宅はもともと引き違い戸による収納をもたなかったが、押入れが約半数の存続を示すのは韓国人に新しく入り込み普及した収納方法と言える。



写真4 押入れ・床の間の使われ方（甲型9号）

おわりに

本研究は朝鮮住宅営団とその標準住宅に関して次のことを明らかにした。

朝鮮住宅営団は日本住宅営団の住宅建設が始まったほぼ同時期の昭和16年7月に設立された。終戦の昭和20年8月までに韓半島に12,184戸の住宅を建設した。この住宅は現在ソウル市内では1,157戸の現存が確認でき、その現存位置から鉄道沿線に集中して建設されたことが分かった。このうち比較的保存状態のよい上道洞の住宅地において、文献調査と並行して65軒の実測調査を行った結果、営団の原型平面図を16種明らかにすることができた。その住宅を日本内地の営団住宅と比較すると気候風土の違う場所で、オンドルの設置・外壁・二重窓等の防寒対策をしながらも意匠・住まい方では続き間座敷・中廊下を中心とする内地式に執着していた住宅であったことが明らかになった。

一方終戦から現在まで韓国人に住まわれた営団住宅には様々な増改築が行われており、この増改築を分析すると変容箇所のほとんどが韓国の伝統住宅である韓屋（ハンオク）がもつ空間構成に近づいてきており、板敷広間中心型、スキップフロア断面型、個室化といった傾向があることを明らかにした。また、存続しているものは居室等よりも、部分的なものが多く、従来韓国では見られなかった玄関や押入れがあげられる。これは日本時代から普及しはじめ、現在では多くの住宅が備えるようになってきている。

以上のように本編では、朝鮮住宅営団の建設した標準住宅を通して、日本人の住宅が海を渡り気候風土の違う地域でどのように変容するのか、また日本人の住宅に他民族が住まうことでどのような変容過程があるのかを具体的に比較分析して、住まいのもつ特性の一端を明らかにした。今後は、他住宅地の事例を加え、さらに細かい分析と考察を行い、変容と存続の要因を探って行きたい。

〈注〉文章表現上、当時の呼称をそのまま用いた箇所のあることをおことわりしておきます。

〈研究組織〉

主査 富井正憲 神奈川大学建築学科 助手
委員 鈴木信弘 東京工業大学建築学科 助手
渋谷 猛 神奈川大学大学院 修士課程
川端 貢 ソウル大学大学院 修士課程